【別表資料1】

自由社による、欠陥箇所「二重申請」案件・一覧表

(前回の検定で「欠陥箇所」と指摘され、修正して合格したにも拘らず、今回の申請で元に戻して再び「欠陥箇所」と指摘され、不合格の要因を成した「二重申請」箇所の一覧)

「欠陥番号」は前者が前回の番号、後者が今回の番号。「指摘事項」「指摘事由」「指摘箇所」は特記なき限り、前回・今回共通。「市販本・不合格教科書」は不合格になった白表紙本を一部修正した市販教科書。波線・下線・() は引用者。網掛けも引用者。

No	欠陥番号	指摘事項 (要修正)	指摘事由 (適用規定基準)	現行教科書 (修正後合格)	市販本・不合格教科書	自由社反論	調査官による反論可否
1	1・9	日本文明の伝統 世界のどの国にも、それぞれ固有の歴史があります。…独自の文明を築いてきました。	生徒が誤解する恐れのある表現である。(華表秩序、国風文化などとの関連) (3-(3))	日本歴史の伝統 世界のどの国にも、それぞれ固有の歴史があります。…独自の文明を育てました。…独自の道を歩んできました。(2頁)	日本文明の伝統 世界のどの国にも、それぞれ固有の歴史があります。…独自の文明を築いてきました。(2頁)	この頁では詳しく書くのはおかしく、華表秩序や国風文化の詳述ではなない。「生徒が誤解する」ことはない。	指摘箇所が華表秩序や国風文化の詳述を求める趣旨の指摘ではない。反論は認められない。
2	12・32	「氷河時代」	表記が不統一である。(同ページ「まともめにチャレンジ」①内、「氷河期」(3-(4)、前回指摘) (同ページ「左地図」④日本人の祖先が来た3つのルート)及び同ページ下欄外「チャレンジ」では「氷河期」(3-(4)、今回指摘)		「氷河期」には日本周辺の海面は今より100mも低く日本列島は大陸と陸続きでした。(21頁④) 「氷河期」に、大陸から人々が日本列島に渡って来た3つのルートの説明をノートに書いてみよう。(同頁脚注)	氷河時代も氷河期も普通に使われている用語で、意味も異なるので、用語が統一なわけではない。あえて使い分けている。	申請図書の記事では同一の内容と読めるため、用語の統一を求めている。反論は認められない。
3	51・96	「聖徳太子と天皇の系図」(59ページも同様) (前回指摘) 「聖徳太子と天皇の系図」中、天皇の代を表す数字 (51・59・71・84の各ページも同様) (今回指摘)	生徒にとって理解し難い表現である。(天皇の代数の根拠) (3-(3)、前回指摘) (数字の根拠) (3-(3)、今回指摘)	皇統譜による。(52,59頁)	「皇統譜の記載なし」(44,51,59,71,84頁)	天皇の代数は国民の間に定着しており、今上天皇が126代であったことは誰もが疑問を挟んでいない。中学生に教えるのにいままさ「皇統譜による」としなくても十分理解できる。	天皇の代数の教え方ははいくつかの見方があり、図中に天皇の代数の根拠が示されておらず、理解し難い。反論は認められない。

欠陥番号	指摘事項 (要修正)	指摘事由 (適用検定基準)	現行教科書 (修正後合格)	市販本・不適合教科書	自由社論	調査官による反論可否
4	<p>聖徳太子は、内政でも外交でも、8世紀に完成する日本の古代律令国家の設計図を描いた指導者だった。<u>〔前回指簡〕</u></p> <p>聖徳太子は、内政でも外交でも、8世紀に完成する日本の古代律令国家建設の方向を示した指導者だった。<u>〔今回指簡〕</u></p>	<p>生徒にとって理解し難い表現である。 (聖徳太子と律令国家の関係) ③-(3)、前回指簡 (聖徳太子と古代律令国家との関係) ③-(3)、今回指簡</p>	<p>聖徳太子は、内政でも外交でも、8世紀に完成する日本の古代中央集権国家の設計図を描いた指導者だった。(55頁)</p>	<p>聖徳太子は、内政でも外交でも、8世紀に完成する日本の古代律令国家建設の方向を示した指導者だった。(47頁)</p>	<p>学習指導要領は「内容の取扱い」として次のように記している。「<u>律令国家の確立に至るまでの過程</u>」については、<u>聖徳太子の政治、大化の改新から律令国家の確立に至るまでの過程</u>を、<u>小学校での学習内容を活用して大きく捉えさせるようにすること。</u>」つまり、「<u>律令国家の確立に至るまでの過程</u>」の最初に「<u>聖徳太子の政治</u>」を扱うように指示しているのであり、この趣旨からも、「<u>次</u>」<u>随所</u>として指摘された教科書の記述は、「<u>生徒にとって理解し難い表現である</u>」とは言えない。</p>	<p>調査官による反論可否 聖徳太子と古代律令国家建設との関係について、近年の学説状況を踏まえた記述になっておらず、誤解をおそれがある。反論は認められない。</p>
5	<p>「菅原道真が提唱した遣唐使廃止の理由」中、③④ (前回指簡) 「③菅原道真が提唱した遣唐使廃止の理由 (894年)」中、「③日本と唐の文化は対等で、もはや学ぶべきものはない」・「④いつの間にか朝貢のようにあつかわれており、国の辱めである」 (今回指簡)</p>	<p>不正確である。「菅家文草」の記述) ③-(1)、前回指簡 生徒が理解するおそれのある表現である。(典拠「菅家文草」に対応する記述があるかのように誤解する。) ③-(3)、今回指簡</p>	<p>「遣唐使廃止の理由」 (③④を指簡) (70頁コラム)</p>	<p>「菅原道真が提唱した遣唐使廃止の理由 (894年)」 ③日本と唐の文化は対等で、もはや学ぶべきものはない。 ④いつの間にか朝貢のようにあつかわれており、国の辱めである。 (60頁コラム) (③④が復活)</p>	<p>〔反論せず〕</p>	

No	欠番番号	指摘事項(要修正)	指摘事由(適用決定基準)	前回教科書(修正後合格)	市販本・不合格教科書	自由社反論	調査官による反論認否
6	108・162	「花の御所 洛中洛外図屏風」中、「3代将軍足利義満が京都室町に造営」(前回指摘) 「⑦花の御所 洛中洛外図屏風」中、「3代将軍足利義満が内裏北西の京都室町に造営。」(今回指摘)	生徒が誤解するおそれのある表現である。(義満が造営した御所であると誤解する。) (3-(3)、前回指摘) 同上(描かれている建物が義満の造営した御所であると誤解する。) (3-(3)、今回指摘)	3代将軍足利義満が京都室町に造営。(94頁上図キャプション)	内裏北西の京都室町に置かれた将軍の邸宅。(85頁上図キャプション) 【自主修正】	(反論せず)	
7	112・172	「乱暴をはたらく足軽」(前回指摘) ①「乱暴をはたらく足軽」(今回指摘)	表紙が不統一である。(作品名が欠落) (3-(4))	略奪する足軽たち(中略) 真如堂縁起絵巻(真正極楽寺蔵) (98頁上図キャプション) (作品名追加)	乱暴をはたらく足軽(中略) (真如堂縁起絵巻 京都府真正極楽寺蔵) (90頁上図キャプション)【自主修正】	(反論せず)	
8	141・188	「地球を三分しようとしたポルトガルとスペイン」中、「16世紀に入ると、東半球でも同国の領土分割線が定められた。」(152ページ表「トルデシヤス条約」全体も同様) (前回指摘) (105ページ右側欄さくらさんの吹き出し中、「世界をふたつに分けて支配しようなんぞいふん勝手ね。」も同様) (今回指摘)	生徒が誤解するおそれのある表現である。(向きの内容) (3-(3)、前回指摘) (凡例には「スペイン・ポルトガルの勢力分割線」とある。) (3-(3)、今回指摘)	16世紀に入ると、太平洋でも同国の航海・探検活動の境界が定められた。(113頁上図キャプション)	16世紀に入ると、東半球でも同国の領土分割線が定められました。(105頁上図キャプション) 世界をふたつに分けて支配しようなんぞいふん勝手ね。(今回補注)	(188・189の指論に対し) 1つの地図に対して2件の指論をしている。1件にまとめるべきである。	同じ図中であっても、指摘する欠陥の内容が異なっているため、指論事項を個別に立てたものである。反論は認められない。
9	146・197	「刀狩令」中、「一、とり集めた刀や短刀などは…かすかすかに使え。」	不正確である。「(使え。)」(3-(1))	一、とり集めた刀や短刀などは…かすかすかに使え。(118頁上図史料)	一、とり集めた刀や短刀などは…かすかすかに使え。(114頁上図史料) 【自主修正】	(反論せず)	
10	150・200	「朝鮮出兵地図」中、「済州島」(前回指摘) 「⑤朝鮮出兵地図」中、「済州島及び「羅州の東岬にある二つの小島の塗色(192ページ左上地図①「日露戦争の戦場」も同様)」	不正確である。(着色) (3-(1)、前回指摘) 生徒が誤解するおそれのある表現である。(朝鮮半島の着色との差異) (3-(3)、今回指摘)	⑤済州島の着色を修正(119頁「朝鮮出兵地図」) 【自主修正】	⑤済州島の着色を修正(115頁「朝鮮出兵地図」) 【自主修正】	(反論せず)	

次席番号	指摘事項(要修正)	指摘事由(適用決定基準)	現行教科書(修正後合格)	市販本・不合格教科書	自由な反論	調査官による反論可否
11	151・201 「南樺州出兵地図」中、「対馬」(前回指摘) 「⑤朝鮮出兵地図」中、「対馬」(今回指摘)	誤記である。(3-2)、(前回指摘)生徒が誤解するおそれのある表現である。(一般的な表記であるかのよう)に誤解する。(3-3)、(今回指摘)	対馬(119頁「南樺州出兵地図」)	対馬(115頁「南樺州出兵地図」) 【自主修正】	(反論せず)	
12	175・214 「フォン・シーボルト」中、「5年間の滞在中に蝦夷・樺太まで踏査して動植物の採集を行っている。」(前回指摘) 「④シーボルト」キャプション中、「5年間の滞在中に蝦夷・樺太まで踏査して」(今回指摘)	誤りである。(蝦夷・樺太踏査)(3-1)	フォン・シーボルト …5年間の滞在中、江戸まで商館長の出府に随行し、多くの動植物を採集している。(138頁(脚注))	フォン・シーボルト …5年間の滞在中、江戸まで商館長の出府に随行するなどして、多くの動植物を採集している。(132頁(脚注)) 【自主修正】	(反論せず)	
13	176・215 「代表的な私塾」中、「1856 吉田松陰…」(前回指摘) 「⑧おもな藩校と私塾一覧」中、「1856 吉田松陰 松下村塾」(今回指摘)	不正確である。(松下村塾の設立年)(3-1)	代表的な私塾 1857 吉田松陰 松下村塾(萩)(松陰が教育開始) (139頁「おもな藩校と私塾一覧」)	代表的な私塾 1857 吉田松陰 松下村塾 萩(松陰が教育開始) (133頁「おもな藩校と私塾一覧」) 【自主修正】	(反論せず)	
14	181・220 海外との貿易によって政治力をつけ、藩財政の立て直しに成功した薩長両藩は…	生徒が誤解するおそれのある表現である。(長州藩の海外貿易)(3-3)、(前回指摘) 同上(長州藩が海外との貿易を行っていたかのように誤解する。)(3-3)、(今回指摘)	藩財政の立て直しに成功した薩長両藩は発言力を強め、(149頁(脚注)) 〔海外との貿易によって政治力をつけ〕を削除	藩財政の立て直しに成功した薩長両藩は発言力を強め、(137頁(脚注)) 【自主修正】	(反論せず)	
15	186・236 イギリスが最初に進出したのは、インドだった。(前回指摘) イギリスが最初に進出したのは、インドで。(前回指摘)	生徒が誤解するおそれのある表現である。(アジアでイギリスが最初に進出したのがインドであるかのよう)に誤解する。(3-3)	インドに進出したイギリスは、(156頁)	イギリスが進出して最も力を入れたのはインドで、(154頁) 【自主修正】	(反論せず)	

No	欠番番号	指摘事項 (要修正)	指摘事由 (適用規定基準)	現行教科書 (修正後合格)	市販本・不合格教科書	自由社反論	調査官による反論可否
16	190・237	地図「19世紀後半のヨーロッパ列強のアジア進出地図」中、マレー半島の塗色 (前回指摘) 〔① 19世紀後半のヨーロッパ列強のアジア進出地図〕中、マレー半島の塗色 (今回指摘)	生徒が誤解するおそれのある表現である。(19世紀後半におけるイギリス領) (3-(3))	〔マレー半島の一部、イギリス領に未着色〕(156頁上部地図)	〔マレー半島はイギリス領に着色〕(154頁上部地図) 【自主修正】	〔反論せず〕	
17	196・249	ペリー-神奈川上陸図 (前回指摘) ⑤タイトル「ペリー-神奈川上陸図」(今回指摘)	不正確である。(3-(1))	ペリー-提督・横浜上陸の図 (159頁脚注)	ペリー-神奈川上陸図 (159頁上部地図キャプション)	指摘箇所は絵画の名称を意味しない。類似の記述は検定に合格した従来他社教科書にも存在している。	提出された他者 (他社) の教科書とは異なり、「ペリー-神奈川上陸図」は絵画の名称と解釈されるため、横浜開港資料館所蔵のものとしては不正確である。反論は認められない。
18	205・256	大政官の読み方 日本 ^④ の律令制では「だじょうかん」、明治維新政府は「だじょうかん」と読む。 (前回指摘) 〔④大政官 (新政府) を構成する要人〕中、〔※「大政官」の読み方 日本 ^④ の律令制では「だじょうかん」、明治維新政府は「だじょうかん」と読みます。〕 (今回指摘)	生徒が誤解するおそれのある表現である。(断定的に過ぎる。) (3-(3))	〔大政官の読み方〕の部分(削除) (166頁開図下のキャプション)	③大政官 (新政府) を構成する要人 ※「大政官」の読み方 日本 ^④ の律令制では「だじょうかん」、明治維新政府は「だじょうかん」と読みます。 (166頁開図下のキャプション)	(中略) 熱心な生徒は、どうして読み方が違うのか不審に思う可能性がある。筆者も、教育現場で質問されたことがある。そのために、あえて分かり易く表記した。また、混用の例があるとしても、このように脚注することには生徒にとって有用な知識の整理となる。	混用の例があることを踏まえ、誤解のないような記述を求めたものである。反論は認められない。

No	欠陥番号	指摘事項(要修正)	指摘事由(適中検定基準)	現行教科書(修正後合格)	市販本・不合格教科書	自由な反論	調査官による反論可否
19	210・262	「一種の奴隷解放」全体(前回指摘) 沖繩学の父といわれる伊波普猷は「琉球処分は一種の奴隷解放だ」と表現しました。身分差別を撤廃した近代法制度が導入されたからです。(今回指摘)	生徒にとって理解し難い表現である。(沖繩の状況について説明が不十分で理解し難い。)(3-(3)、前回指摘) 生徒が誤解するおそれのある表現である。(伊波普猷のいう「奴隷」状態)(3-(3)、今回指摘)	「一種の奴隷解放」には薩摩と清国に同属し、人々には薩摩への毎年の貢納のほか、清国から迎える使節の接待の費用も大きな負担でした。これを高く評価して、沖繩学の父といわれる伊波普猷は「琉球処分は一種の奴隷解放だ」と表現しました。(174頁) 〔加筆して「一種の奴隷解放」を説明〕	「奴隷解放」だった琉球処分 清国との冊封関係を終わらせたのが、1879(明治12)年、琉球を正式に日本領とした琉球処分でした。沖繩学の父といわれる伊波普猷は「琉球処分は一種の奴隷解放だ」と表現しました。身分差別を撤廃した近代法制度が導入されたからです。(174頁)	薩摩と清からの解放という一面のみならず、身分差別撤廃という面は明らかに存在している。誤りではない。	調査官による反論可否 一般的な解釈ではなく、誤解するおそれがある。反論は認められない。
20	236・277	「日露戦争後の日本の領土と権益」中、「韓国における日本の支配権」(前回指摘) 〔⑤日露戦争後の日本の領土と権益〕中、「韓国における日本の支配権」(今回指摘)	生徒にとって理解し難い表現である。(同ページ6行目には「朝鮮半島の主導権」)(3-(3)、前回指摘) (同ページ5行目には「朝鮮半島の指導権」)(3-(3)、今回指摘)	日露戦争後の日本の領土と権益 朝鮮半島における日本の主導権(195頁地図) …この条約で日本は朝鮮半島の主導権を韓国に認めさせた。(195頁)	日露戦争後の日本の領土と権益 韓国における日本の支配権(193頁地図) …この条約で、日本は朝鮮半島の指導権を韓国に認めさせました。(193頁)	「支配権」「指導権」は歴史用語ではないから、異なった表現があっても構わない。	「支配権」と「指導権」とは異なる概念であり、理解し難い。反論は認められない。
21	240・283	「韓国併合」全体	生徒が誤解するおそれのある表現である。(韓国併合の実態)(3-(3))	1910(明治43)年、日本は、武力を背景に韓国内の反対をおさえ、併合を断行した(韓国併合)。韓国国内では、民族の独立を失うことへの強い抵抗があった。(198頁) 〔検定意見に従い、併合への抵抗を強調する修正〕	韓国国内には日本と合邦化することを望む勢力と反対する勢力がありました。1910(明治43)年、日本は、親日派の勢力を背景に条約を結び、韓国併合を断行しました。韓国国内では、民族の独立を失ったとして抵抗する人もいました。(198頁)	事実添って、「誤解」するおそれはない。	多少の抵抗はあっても順調に併合が進んだと誤解するおそれがある。反論は認められない。

No	欠陥番号	指摘事項(要修正)	指摘事由(適用規定基準)	現行教科書(修正後合格)	市販本・不合格教科書	自由社反論	調査官による反論可否
22	242・287	「日本語と朝鮮語(ハングル)を併用する教科書」中、「 <u>李朝時代には普及していなかった文字ハングル</u> 」(前回指摘) ② 日本語と朝鮮語(ハングル)を併用する教科書」中、「 <u>李朝時代</u> 」(今回指摘)	生徒が理解するおそれのある表現である。(ハングル普及の程度) (3-3)、前回指摘 生徒にとって理解し難い表現である。(86ページ)18行目「 <u>朝鮮(李氏朝鮮)</u> 」との関係 (3-3)、今回指摘	日本語と朝鮮語(ハングル)を併用する教科書 李朝時代から使われていた文字ハングルを朝鮮固有のものとして普通教育に取り入れた。(199 頁上部写真キャプション)	日本語と朝鮮語(ハングル)を併用する教科書 韓国併合後、李氏朝鮮の時代は普及してなかった文字ハングルが朝鮮固有のものとして教育に取り入れられました。(198 頁上部写真キャプション)	(反論せず)	
23	254・298	「三国同盟と三国協商」中、「 <u>協商</u> とは、 <u>文書での取り決めはしないが強い</u> 」(今回指摘) ① 三国同盟と三国協商」中、「 <u>同盟とは、条約のように文書で結ばれる国家関係のこと。協商とは、文書での取り決めはしないが強い</u> 」(今回指摘)	生徒が理解するおそれのある表現である。「(協商)の定義」(3-3)強いながらも示す外交用語。」	三国同盟と三国協商 同盟とは一般に複数の国家が相互に軍事的協力をすること。協商とは、同盟ほど強固ではない国家間の協同関係のこと。(212 頁上部写真キャプション)	三国同盟と三国協商 同盟とは、条約のように文書で結ばれる国家関係のこと。協商とは、文書での取り決めはしないが強いながらも示す外交用語です。(212 頁上部写真キャプション)	「同盟」と「協商」の語義の違いについて書いておられることには誤りではない。 「文書での取り決めはしない」という定義については、協商の定義について理解し難い。反論は認められない。	
24	257・300	「工場ではたらく女性」中、「 <u>多くの男性が出兵したこと、女性の社会進出をうながすことになった</u> 」(前回指摘) ⑦ 工場ではたらく女性」中、「 <u>多くの男性が出兵したこと、女性の社会進出をうながすことになった</u> 」(今回指摘)	誤記である。(出兵) (3-2)	工場ではたらく女性 多くの男性が出兵したこと、女性の社会進出をうながすことになった。(215 頁側面写真キャプション)	工場ではたらく女性 多くの男性が出兵したこと、女性の社会進出をうながすことになりました。(215 頁側面写真キャプション) 【自主修正】	(反論せず)	
25	258・301	「第一次世界大戦後のヨーロッパ地図」中、「 <u>アイランドの塗色</u> 」(前回指摘) ② 第一次世界大戦後のヨーロッパ地図 (今回指摘)	生徒が理解するおそれのある図である。(アイランドが「バルサイユ条約の民族自決の原則で独立した国」であるかのように誤解する。) (3-3)	第一次世界大戦後のヨーロッパ地図 「バルサイユ条約の民族自決の原則で独立した国」の塗色から、アイランドを外す (216 頁上部)	第一次世界大戦後のヨーロッパ地図 「バルサイユ条約の民族自決の原則で独立した国」の塗色から、アイランドを外す (216 頁上部) 【自主修正】	(反論せず)	